

蛇王龍が白兔に憑依転生するなんて間違っているだろうか！？

XIII世

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

転生神という存在の身勝手な転生によって蛇王龍へと転生した元人間主人公がまたも身勝手に転生させられ、白兔にへと憑依転生してしまう話。

アンチ・ヘイトは一応

1 3	1 2	1 1	1 0	9	8	7	6	5	4	3	2	1	プロ ロー グ
46	41	36	33	30	27	22	20	17	15	11	9	4	1

目
次

プロローグ

我オレの名はダラ・アマデユラ、某超大人気狩猟ゲームの看板モンスターの一体だ。

驚くかもしれんが、我オレは前世は人間で、無職だった。

交通事故で死んでしまった我オレは転生神を名乗る存在から強制的に転生させられてしまうのだが、その世界がこのモンスターハンターの世界であり転生先がダラ・アマデユラであった。

その転生した日から大変であった、移動する度に地形が崩れるし、我オレを討伐しに来る狩人達ハンターを返り討ちにしたりしていた。

千を越える狩人ハンターを返り討ちにし続けた結果、我オレは狩人共ハンターに畏怖されるほどの存在となり、平穏な日々を送るようになっていた。

そんなある日、我オレが古龍渡りをするクシャルダオラを絞殺して丸呑みをしていた時、頭の中で聞き覚えのある声が響いてくる。

『へえ、結構経験を積んであるみてえじゃねえか。』

その声が響いてきた瞬間、我オレの機嫌は氷点下まで落ちる。何故なら、その声の主は転生神のものだからだ。

「シユルルルルルル・・・!!」

『おいおい、そんなに気を荒立ててんじゃねえよ。』

(巫山戯るな、今更何をしに来た)

『ケケケツ、そう邪険にするなよ。俺様はお前を迎えに来てやったんだぜ』

(どういう意味だ、何千年も放置しておいて今更迎えに来たというのはどういう見だ)

『簡単な話だ、お前を別の世界に転生オレさせるんだよ。』

その言葉を聞いた瞬間、我オレは口を最大まで開いて転生神を呑み込もうと襲いかかる。

しかし、それは叶わず我オレは意識を失った。

『ケケツ、あの野郎初めて会った頃は礼儀正しかったのに尊大になりやがったな。まあ、その位が丁度良いがな。』

そう言いながら俺様はあいつの転生先を設定する。

『ケケケツ、蛇から白兔になるってのはどんな気分だろうか……。』

「おのれっ!!」

意識を失っていた我が目を覚ますと、そこはどこかの人間の街にいた。

その事から転生させられたことを察するが、我は身体の違和感に気付いた。

その違和感というのが、視界の低さなどからしてまるで子供になったような感覚があった。

我はゆっくりと呼吸を整えてから自分の身体を確認する。

すると、そこには白兔を彷彿とさせる少年の姿があった。

その顔を見た瞬間、この世界がどうい世界なのかを理解する。

今転生させられた世界は「ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか」だ。

そして、俺の姿は主人公であるベル・クラネルだ。

「これは一体……。いや、考えるまでもないな。」

我は主人公に憑依転生させた諸悪の根源である転生神に激しい怒りの感情を抱くもぶつけようのない怒りを抱いても仕方がないと判断し、一先ずは現状を確認するところから始めることにした。

改めて自分の服装を確認すると、ダンジョンに潜るような格好をしておらず日常を過ごすような服装だった。

「ふむ、とりあえずは神へステイアを探すとするか。」

そう言いながら我はベル・クラネルの主神となる神へステイアを探すことにした。

すると、案外簡単に見つけることが出来た。

白妖精の男に勧誘を断られ、うなだれる神へステイアに近付きこう言った。

「すまない、少し話を良いか女神様。」

そう言っ我が声を掛けると、神へステイアは俯いていた顔を勢いよく上げてこう言ってくる。

「そのこのヒューマンの君、僕の眷族ファミリアになつてくれないかい!?」
手を差し出ししながらそう言つてくる神へステイアに対して我オレはこ
う思った。

「〔必死すぎるだろ・・・。〕」

その言葉を言うのをグツと堪えてこう言うのだった。

「ああ、むしろこっちは願つたり叶つたりだ。」

そう言つて我オレは神へステイアの手を手にとつた。

こうして迷宮都市オラリオに新興派閥〔ヘステイア・ファミリア〕が結成さ
れ、元蛇王龍であり白兎である我オレの〔眷族の物語〕が始まるのだった。

その後、我^{オレ}とヘステイアは互いに自己紹介を済ませた後、とある書店へと入った。

店内には老齡のヒューマンが居て、ヘステイアが二階にある書庫を借りるといふと、それを了承した。

どうやら、馴染みの店のような感じだなと思った。

書庫の中に入ると、ヘステイアがこう言ってくる。

「それじゃあ、ベル君。神^{ファールナ}の恩恵を刻むから上着を脱いでくれ。」

「分かった。」

ヘステイアの言葉に我^{オレ}は二つ返事で上着を脱いだ。

「わあ、ベル君の身体結構鍛えてあるんだね!!」

そう言ってくるヘステイアに対して疑問に思い、我^{オレ}も確認するとそこには鍛え抜かれた肉体があった。

「これは・・・、ダラ・アマデユラだった頃の我^{オレ}に反映されているのか?」

そんな疑問を抱いていると、ヘステイアが声を掛けてくる。

「ベル君、どうかしたのかい?」

「いや、気にしないでくれ。」

我^{オレ}はそう言つてヘステイアの前に背中を向ける、

「それじゃあ、恩恵を刻むぜ!」

「ああ、頼む。」

その言葉と共にヘステイアは背中に神^{ファールナ}の恩恵を刻んでいく。
「なっ、なんなんだくっく!?!」

突然、ヘステイアは大声を上げて叫びだした。

「どうした、ヘステイア。」

我^{オレ}が問いかけるとヘステイアはこう言ってくる。

「ベル君、君は一体何者なんだい?」

「どういう意味だ?」

ヘステイアの言葉に我^{オレ}はそう返した。

「とりあえず、君の「ステイタス」を確認してくれ。」

そう言つてヘステイアは我の【ステイタス】を書き写した羊皮紙を手渡してくる。

そして、その羊皮紙に書かれていた我の【ステイタス】は……。
ベル・クラネル

G級

力EX 耐久EX 器用EX 敏捷EX 魔力EX

古龍EX 蛇王龍EX 耐異常SSS 狩人SSS 拳打SSS

破碎SSS 剛身SSS 幸運SSS 採掘SSS

【蛇王龍】

・早熟する

・蛇王龍が続く限り効果持続

・蛇王龍の丈により効果向上

【蛇王龍の肉体】

・力、耐久、器用、敏捷のアビリティ常時超高補正

・状態異常無効

・蛇王龍が続く限り効果持続

・蛇王龍の丈により効果向上

【蛇王龍の剣鱗】

・防御力超補正

【蛇王龍の扇刃】

・力のアビリティ超高補正

・武器装備時、効果向上

・蛇王龍が続く限り効果持続

・蛇王龍の丈により効果向上

【蛇王龍の素材】

・睡眠時、蛇王龍の素材が自動的に採取される。

・蛇王龍が続く限り効果持続

・蛇王龍の丈により効果向上

【蛇王龍の鋼皮】

・耐久のアビリティ超高補正

・防具装備時、効果向上

- ・蛇王龍ほこりが続く限り効果持続
- ・蛇王龍ほこりの丈により効果向上

「ステイタス」を見て我はオレはダラ・アマデユラだった頃の事が反映されている事が分かる物だった。

「ベル君、君は一体何者なんだい？」

その言葉に対して我はオレはこう言った。

「その事については後で話そう。ここでは誰に聞かれているか分からないからな。」

そう言っオレて我は上着を着て立ち上がる。

「それもそうだね、それじゃあ行こうか僕達の本拠ホームへ!!」

「ああ。」

書店を出て俺達は「ヘステイア・ファミリア」の本拠ホームである廃教会の隠し部屋へと帰ってきた。

すると、ヘステイアがこう言ってくる。

「ごめんよ、ベル君。本拠ホームがこんな所で……。」

そう言っオレてくるヘステイアに対して我はこう言った。

「いや、ここから成り上がっていくと思えば悪くないだろう。」

そう言っオレて我はソファに腰掛けて言葉を続ける。

「それでは、我の事を話すとするか。」

「!! そうだね、聞かせてくれベル君。」

我は自分の身に起こった事全てを話した。

元々別の世界の間人だったという事

転生神と呼ばれる存在に無理矢理転生させられ、蛇王龍ダラ・アマデユラとして異世界で転生させられた事。

何千年も放置されながらも生きていると転生神がまたも現れ、この世界に転生させられた事。

全てを話し終えると、ヘステイアは立ち上がり大声を上げる。

「子供を無理矢理転生させるだっオレて!?!何処の馬鹿だ、そんなことをしでかすのは!!」

憤慨するヘステイアに我はオレは嬉しく思いながらもこう言った。

「ヘスティア、落ち着け。」

「これが落ち着いていられるか!!」

我^{オレ}の言葉を聞いてヘスティアは声を荒げる。

「我^{オレ}の為に怒ってくれるのは感謝するが、あいつはそれすら楽しむのではないかと思っっている。だから、そんなに荒ぶる事はないさ。」

そう言うと、ヘスティアは椅子に座り直しながらこう言ってくる。

「君がそれでいいならボクは構わないけど……。」

「よし、それならこの話は終わりだ。」

ヘスティアの言葉に我^{オレ}はそう言って話を終わらせるのだった。

その話が終わると、俺はソファから立ち上がりこう言った。

「ヘスティア、我^{オレ}はギルドに行っ^て冒険者登録をしてくる。」

「うん、分かったよベル君。」

そう言っ^てから我^{オレ}は本拠^{ホーム}を出て、ギルドへと向かうのだった。

ギルドに着くと、ダンジョンから戻^{つて}きた冒険者で溢^れていた。

その中を進んでいき、受付に辿^り着いた我^{オレ}は目の前にいるギルドの女性職員へと声を掛ける。

「すまない、冒険者登録をしたいんだが……。」

我^{オレ}がそう言っ^と、ギルドの女性職員がこう言っ^て来る。

「それでは、こちらの書類に名前などを記入して提出してください。」
「分かった。」

女性職員の言う事に従^{つて}手渡された紙に詰まる事無く書き終^える。

「書き終わった、確認を頼む。」

「はい、かしこまりました。」

だが、俺のレベルの所はG級と表記されている為余計な騒ぎを避ける為に偽装はしているがな。

全て記入し終えた紙を確認していく女性職員がこう言っ^て来る。

「ヘスティア・ファミリア」というのは新興派閥ということですね。」

「ああ。」

女性職員の言葉に同意する。

そうやって話が進んでいき、^{オレ}私の冒険者登録が完了した。すると、女性職員がこう言ってくる。

「あの、よろしければ新人冒険者のためのダンジョン講義を実施させていただきます。どうですか？」

そう言ってくる女性職員に対して俺はこう言った。

「なら、頼む」

「解りました、それではこちらの通路に別室でお待ち下さい。ダンジョンに関する資料をお持ち致しますので」

「解った」

こうして、^{オレ}私の九千年振りの講義を受けるのだった。

三時間の講義を終えて私は懐かしさを感じる気怠さを感じていた。

「まあ、結構面白かったし」

そう思いながら正面の女性職員がこう言ってくる。

「それでは、クラネル氏はダンジョンにおけるアドバイザーはどうされますか？」

「アドバイザー？」

「はい、冒険者の方には専属のアドバイザーを務めるのも我々ギルド職員の役目でもありますので」

「なら、君で良い。少しでも顔を知っている人物の方が安心できるの
でな」

「分かりました、それでは私エイナ・チュールがクラネル氏の専属アドバイザーとなります」

「ああ、よろしく頼むエイナ」

「はい」

こうして、^{オレ}私の冒険者登録は無事に終了するのだった。

冒険者登録を済ませた我オレは新規冒険者に貸し出していているという武器と防具を受け取ると、早速ダンジョンへと潜るのだった。

まず最初にダンジョンの一階層に足を踏み入れると、早速ゴブリンが三体襲い掛かって来るのに対して手に握るナイフで切り捨てる。

『グギャアアアアッ!?!』

ゴブリンは断末魔と共に灰となり魔石だけが残る、そしてその瞬間バキリツと音を立ててナイフが砕け散るのだった。

「ふむ、ナイフ自体が我オレの力に耐えられなかったか」

砕けたナイフに視線を落しながらそう言っつてナイフを収納してから先へと進んでいく。

ナイフが壊れてからは襲って来るモンスターに拳と蹴りで対応している。

「フツ!!」

『グギャアアアアアアアッ!!』

ゴブリンの顔面を潰し、コボルトの顎を蹴り上げ、ダンジョン・リザードを叩き落として魔石と怪物素材を回収していく。

「これでようやく身体の感覚が理解出来たぞ」

そう言いながら手を握ったり開いたりしていると、我オレはある物を発見する。

それは下層に繋がる階段だった。

「よし、身体の感覚が戻って来た所だしな。もう少しだけ降りてみるか」

そう言っつて我オレは一階層から二階層へと足を踏み入れるのだった。

「正直、はしやぎすぎたという自覚はあるがまさか深層まで降りて来てしまうとはな…」

その後、二階層に降りた我^{オレ}だったが物足りなさを感じた為この際だから行ける所まで行ってしまうという安易な考えに至り、到達階層をどんどん増やしていった。

その結果が、短時間で深層五十階層まで降りて来てしまった。

「数時間前の自分を殴りたい…」

そう言いながらもそのまま立ち止まっている訳にも行かない為、俺はどこかで腰を下ろせる場所を探し始めるも、数分で見つける事が出来た。

「ふう、魔石と怪物素材もかなり集まったな」
ドロップアイテム

休息を取るにあたって我^{オレ}は各階層で集めた魔石と怪物素材を確認していく。

「これでよし、戻ると…」

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!」

「!? さっきの悲鳴は向こうからだな」

整理を終えて地上に帰還しようとした矢先、悲痛な叫び声が響き渡るのを聞いた我^{オレ}はその声が響いてきた場所にへと走る。

すると、声の響いてきた場所に着くと目に飛び込んできたのは極彩色の芋虫がどこかの派閥^{ファミリア}の野営地^{キャンプ}を襲っている光景だった。

どこぞの派閥ファミリアの野営地キャンプが襲われている、と言ったが俺は襲われている派閥ファミリアの事を知っている。
野営地キャンプの至る所に滑稽な笑みを浮かべた道化師ピエロの紋章エンブレムの派閥ファミリアを俺は一つしか知らない。

「ロキ・ファミリア」、原作でも外伝でもその強さは本物であり二大派閥の一角である事を証明している。

そして、今の状況はもしかしなくても外伝でもあった事態である事を理解した。

そうこうしている内に別行動をしていた「ロキ・ファミリア」の幹部達も戻って来て形勢が逆転し芋虫は全て焼き払われるのだった。

更に言えば後から現れた巨大モンスターも剣姫ことアイズ・ヴァレンシュタインによって倒されるのだった。

何事も無く終わった事を確認した俺は地上に戻ろうと動き始める。

「さて、我オレは帰ると…」

「ウホオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!」

俺がそう言い掛けた瞬間、聞き覚えのあり過ぎる咆哮オレに帰り道に向いていた足を止める。

「まさか、奴もこの世界に来ているのか…!?!」

我オレはその咆哮を聞いて驚きを隠せずにした、自分以外にも送られているとは思ってもよらなかったからだ。

「不味いな、「ロキ・ファミリア」は乗り切ったとはいえ疲弊している。そんな状態でラージヤンは仕留めるのは出来るのかが疑問だな、もしもの時は我オレが介入すればいいだろう」

そう言いながら我オレは咆哮の聞こえた場所へと向かうのだった。

「総員、警戒!!」

私達は今、目の前に現れた新種のモンスターと対峙している。

突然現れたモンスターは黒い毛並みに一対の巨大な角、発達した腕が特徴のモンスター。

でも、このモンスターは普通じゃない感じがする…。

それは他の皆も感じている…、油断すれば殺される…!!

「なんなのよ、コイツ」

「分かんないけど、モンスターなら倒さないかね」

「サツサと片付けんぞ」

ティオネ、ティオナ、ベートさんがそう言っていると、フィンから指示が飛んで来る。

「僕、アイズ、ベートはモンスターの気を引いて隙を作りつつ削って行く！ガレス、ティオネ、ティオナは二人が作った隙を付いて攻撃するんだ！それを交互に続けて疲弊させてからリヴェリアとレフィーヤの魔法で止めを刺す!!ラウルとアナキティは他の団員を連れて退避!!」

「はい、団長!!」

「オツケー!!」

「任せておけっ!!」

「了解した!!」

「わ、わかりました!!」

「ぶっ殺してやる!!」

「うん!!」

「はいっす!!」

「はい!!」

こうして、私達は未知のモンスターへと挑むのだった。

「不味いな、これは」

そう言いながら我は^{オレ}ラージャンと戦闘を繰り広げる【ロキ・ファミリア】の様子を見ていた。

敏捷の高い三人がラージャンの隙を作っても、ラージャン自体の動

きを抑制していないから簡単に躲かれてしまう。

更に、ラージヤンの攻撃は破壊力があるから躲す他ないが動きが読み辛いのか攻撃を受ける形を取らざるを得ないようだ。

魔法で対応しようにも動きが早過ぎて一歩でも間違えば味方に被弾してしまうから撃とうにも撃てない状態が続いている。

更に攻撃が当たったとしても一番硬い腕である為か、決定打には至っておらず苦戦している。

しかも、ラージヤンは金獅子の由来でもある激昂状態にまだなっていない。

もし、現状を打開できないまま激昂状態になられたら全滅する。

そう判断した我^{オレ}はこの戦いに介入する事にした。

「あーもー、攻撃あつたんないよーっ!!」

ティオナがそう言いながらも拳を放つけど空を切ってしまう。

「チヨロチヨロしてんじゃねえーぞ猿野郎!!」

ティオネも激怒しながら拳を放つけどきつきのティオナと同じで空を切る。

「くそつたれがあっ!!」

ベートさんが蹴りを放つと腕に当たるも全く効いた様子が無い。

「これでどうじゃ!!」

ガレスの戦斧の一撃も腕に弾かれてしまう。

「フッ!!」

ガレスの攻撃の隙間を埋めるようにフィンの槍が攻撃するけど腕の薙ぎ払いで弾かれてしまう。

「やあっ!!」

私の攻撃も反応して躲されてしまう。

それに動きが速すぎてリヴェリアも、レフィーヤも魔法を撃てないでいる。

「がはっ!?」「ティオナ(さん) ツ!!」「」

このままだとジリ貧だと思っていると、ティオナがモンスターの攻

撃をまともに当たってしまい壁に叩きつけられてしまった。

叫ぶ私達を尻目にモンスターはティオナに襲い掛かった。

間に合わない、そう思った瞬間ティオナに襲い掛かったと思っていたモンスターが逆方向に飛んで行き壁に叩きつけられていた。

一瞬、何が起こったのか理解できなかった私達だったけど吹き飛んだ理由は解った。

拳を突きだした格好をしてティオナの目の前に立っている白髪の少年がモンスターを殴り飛ばしたんだという事を…。

「えっ…、誰？」

ティオナの声で意識を覚醒した私達は少年の言葉に耳を傾ける。

「それは後にするとしよう。まずは、ラージヤンを止めるとしよう」

ラージヤン、あのモンスターの事を言っているのかな？

「ウホオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!」

そう考えていると、後ろから咆哮が聞こえて来て警戒する私達の横を通って少年はこう言った。

「さあ、一狩り行こうぜ!!」

戦闘場所に向かってしていると、「ロキ・ファミリア」の【アマゾン大切断】ティオナ・ヒリユテがラージヤンに殴り飛ばされた光景が目に入り、追撃を仕掛けるラージヤンとティオナ・ヒリユテとの間に入ると同時にラージヤンの顔面に拳を叩き込むと飛んで行った。

「えっ…、誰？」

ティオナ・ヒリユテの言葉に我はオレこう言った。

「自己紹介は後だ。まずは、ラージヤンを止めるとしよう」

「ウホオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!」

そう言った後、ラージヤンの咆哮が聞こえて来る。

我は【オレロキ・ファミリア】を横切ってこう言った。

「さあ、一狩り行こうぜ!!」

我^{オレ}がお決まりの台詞を言った所で凶^{ヴァナルガンド} 狼^{オレ}が噛み付いてくる。

「何が一狩り行こうぜ、だ!!勝手に出てきて人の獲物を横取りしようとしてんじやねえぞ、兎野郎!!」

そう言ってくる凶^{ヴァナルガンド} 狼^{オレ}に対して我^{オレ}はこう言い返した。

「文句なら後にしろ、凶^{ヴァナルガンド} 狼^{オレ}。暢気に話をしていられるほど

ラー^奴ジャンは大人しくない」

我^{オレ}の言葉に対して今度は勇者^{ブレイバー}が反応する。

「もしかして、君はあのモンスターのことを知っているのかい?」

「ああ、まあな。我^{オレ}の（前世の世界で）住んでいた場所に居たからな」

『?!』

我^{オレ}の言葉に衝撃を受ける「ロキ・ファミリア」の面々は驚愕の表情を浮かべる。

しかし、今はそんな悠長に構えていられない。

「ウホオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!」

咆哮と共にラー^奴ジャンは自分に痛手を負わせた我^{オレ}に向かって右拳を打ち下ろして襲ってくる。

それに対して我^{オレ}はがら空きになった右脇腹に向かって本気の蹴りを叩き込むと骨の碎ける感触が伝わってくる。

そして、蹴りを喰らったラー^奴ジャンは先程殴り飛ばされた時と同様に宙を舞い、壁に激突し地面に倒れてのたうち回るもその命を落とすのだった。

早急に討伐できたことに関しては幸運と言いたところだが、ラー^奴ジャンを知っている我^{オレ}としては違和感でしかない。

「ふう、こんな所か」

そう言いながら我^{オレ}は体を伸ばしていると、大切断^{アマゾン}が話しかけて来る。

「ねえねえ、あのモンスター倒したんだよね?」

「ああ、それがどうかしたか」

「なんで灰にならないのかなって思ってたさ」

「簡単な話だ、ラージヤンはダンジョンで生まれたのではなく自然界で生物として生まれているからだ」

『は?!』

我の言葉に「ロキ・ファミリア」の面々はキョトンとした顔をする。

「フザけたこと抜かしてんじゃねえぞ、兎野郎！第一級冒険者が苦戦するような生物がモンスターじゃねえ訳ねえだろ!!」

「だが、今お前達の目の前に居るラージヤンは正真正銘自然界で生まれた生物だ。むしろ、なんでコイツがダンジョンにいるのかが謎だ」

凶^{オレ}狼の言葉に我は間髪入れずに答える。

「それってどういう事?」

「ラージヤンは「超攻撃的生物」と呼ばれるほど好戦的で獰猛な生物なんだ。眠らせて運び込んだとしても今の今まで騒ぎになっていないことがおかしい」

アマゾン^{ヨルムガンド}の問いに答えていると、怒^{オレ}蛇が話しかけて来る。

「つまり、こんな凶暴な奴がいたら騒ぎになることは確実って事ね」

「ああ、それにラージヤンはこんなにも弱くはない」

「はあ?それどういう意味よ」

その言葉に対して剣呑とした空気が漂う。

もしかしなくても、自分たちが弱いと言われていると思っているのだろうか。

結果としてはそうかもしれないが、違う。

「本来ラージヤンはあそこまで打たれ弱くない、我の蹴り一発で仕留めることは出来ない。つまり、ラージヤンは他に戦っていた

存在が居ると言うことだ」

「なるほど、僕達と交戦した時から瀕死だったという事か・・・」

「チッ!!」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

険しい顔をする「ロキ・ファミリア」の面々に対して我はかける言葉などなかった。

オツ!!!」

大穴の底から打ち上がってくる砲ヴァアルガング・ドラゴン 竜の咆哮に我は眉一つ動かさずに見下ろしている。

すると、一匹の砲ヴァアルガング・ドラゴン 竜が顎を開く。

今まさに階層を貫く大炎塊が装填された口が直上にいる我に標準を定められた。

「チツ、めんどくせえな」

そう言っている間にも竜の口から火球が発射されるも、降下中ということ忘れてしまうほどの敏捷で岩盤を蹴り抜き、火球を回避し底へと向かう。

しかし、飲み込まれたとしても蛇王龍からすればこんな火なんぞ無意味に等しいんだよ。

だが、まあ爆破耐性が低いから厄介だとは思った。

大火球を回避で乗りきった我は大穴の底に到着したのだった。

「さて、ここにラージヤンを瀕死にさせた奴がいるのか？」

そんなことを言っていると、紫紺の飛竜が襲いかかってくるも一蹴するのだった。

「探すにしてもこいつらは邪魔だよな……。ブツ潰す」

その言葉通りに襲いかかってくる大紅竜と紫紺の飛竜をその身一つで蹂躪していく。

火球を吐こうとするならば下顎を蹴りあげ、拳と蹴りで一撃で粉碎していく。

そうして、全てのモンスターを倒した後大量の魔石と怪物素材が転がっていた。

「これは・・・持って帰るのが骨だな・・・」

そう愚痴りながらも回収し我は早速原因を探るために動き始める。

ラージヤンをあそこまで弱らせれるとすれば古龍級生物か古龍の奴等か、狩人だ。

もしかすれば、あの世界の狩人が来ているのであれば早く接触しなくちやならなくなる。

そうやって歩き回っていると、そこであることに気がつく。

炎王龍^{テオ・テスカトル}・・・、前世では古龍渡りをしている個体を捕食したことは何度かあるがああ振り撒いている粉塵が一番面倒臭いんだよな。

あれのせいで我^{オレ}の住処が何度も地形変化したことか・・・。

過去の記憶を振り返っていると最初に炎王龍^{テオ・テスカトル}が動きを見せる。

突貫してくると同時に飛びかかってくる炎王龍^{テオ・テスカトル}に対して大きく後ろに跳んだ。

そして、炎王龍^{テオ・テスカトル}が着地した瞬間爆発が起きる。

「やはりな」

粉塵を起爆させた炎王龍^{テオ・テスカトル}に隙が生じる。

その瞬間を逃すこと無く、炎王龍^{テオ・テスカトル}の懐に潜り込みガラ空きになっている胴体^{テオ・テスカトル}に右拳による一撃を食らわせる。

「グオオオオッ!」

それによって呻き声を上げるが、我は追撃として浮き上がった炎王龍^{テオ・テスカトル}の尾を掴み戦鎚^{ハンマー}投げの要領で投げ飛ばして見せた。

ダンジョンの壁に激突した炎王龍^{テオ・テスカトル}は起き上がると同時に駆け始めたかと思えば突然空を飛び始める。

それに伴って橙色の粉塵も周囲に散布されていくのを見て我は奴のしようとしている事が解った。

「拙い・・・」

そう言葉を続けようとしたが時既に遅し、その瞬間炎王龍^{テオ・テスカトル}は火花を起こした瞬間我は爆炎に飲み込まれた。

「スーパァーノヴァ」

自身の周囲に広範囲を巻き込むド迫力の大爆発を巻き起こす大技を使ってくるって事は奴もラージヤンとの戦闘で弱っていることの証明だ。

「げほっげほっ・・・!!本当に面倒だ・・・」

そう言いながらも我は自分の状態も確認する。

全身は煤に塗れ防御した腕は重度の火傷を負い所々に軽度の火傷を負っている。

「グウオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!!」

すると、炎王龍テオ・テスカトルが此方を見て勝利を確信したかのように雄叫びを上げたのだった。

その瞬間、我の中の何かがキレた。

「オイ、何を勝ち誇ってやがる……。今もお前の敵は生きてるぞ、それなのに勝ち鬨を上げるたあ調子に乗ってんじゃねえぞ!!!」

その怒号と共に地面を蹴り碎くと同時に炎王龍テオ・テスカトルの懐に入り込み顎目掛けて右拳を叩き込むと顎の骨が碎ける音が響く。

「グルウオツ!?!」

当然の衝撃に勝ち誇っていた炎王龍テオ・テスカトルが動揺する。

右拳を喰らわせた後一度地面に降り、今度が喉に右の貫手を放つと喉の肉を抉りそのまま声帯をも潰した。

「がっ……。がっ……。!?!」

喉を潰され顎も碎かれた炎王龍テオ・テスカトルは自身の巨体をふらつかせるほど足下が覚束ない様子だった。

「これで終わりだ」

我はその一言と共に炎王龍テオ・テスカトルの頭蓋あたまを踏み砕いたのだった。

「ふう、この身体での戦闘はまだ慣れる必要があるな」

そう言っ我は炎王龍テオ・テスカトルの死体と他の怪物素材ドロップアイテムを持って地上へと帰還するのだった。

我が五十階層に戻ってくると、早速炎王龍テオテスカトルと金獅子ラージャンの解体へ取りかかる。

そして、解体して手に入れた素材は……。

テオ・テスカトルからは獄炎の龍鱗・炎王龍の堅殻・炎龍の宝玉

ラージャンからは金獅子の剛角・金獅子の重牙・牢固な重骨

それをバッグパックに無理矢理押し込んでから我は地上に戻るところにした。

ちなみに解体で残った肉は根性で完食した。

そうして、地上に戻ってくるとテオとラージャンの素材以外の魔石ドロツプアイテムと怪物素材を換金するためにギルドに向かうのだった。

「換金を頼む」

「はい、畏まりました」

換金を済ませると、総額八千万ヴァリスとなって俺の手に帰ってきた。

「初のダンジョンにしてはまあまあか」

そうやって我はギルドを後にするのだった。

そうして帰宅途中に夕食の素材を買ってから本拠ホームに戻っていると明らかに我の事を尾行している奴らがいる。

この感じから我の稼いだヴァリスが目的か……、相手は恐らく「ソーマ・ファミア」だな。

尾行者の正体に当たりを付けて我は迎撃するために路地裏へ入り込む。

そうして、路地裏の奥まで行く行き止まりに行き着いた。

「ここなら誰にも見られないだろう」

そう言っていると、尾行してきた冒険者達が姿を現す。

「観念しろ、ガキ。大人しく金を渡すんなら無傷で……ぶぎゃっ!」

最初にやってきた男に対して我は不意打ちで蹴りを叩き込んだ。

「てめえこのクソガキ舐めた真似しやがってもう泣いて謝っても許さねえぞ!!」

蹴りを入れられた男が得物である剣を抜きながら

怒声を上げてくる。

「ふん、酒に溺れ子供を食い物にする外道にはこれくらい優しいくらいだろう」

嘲笑混じりにそう言つてやると冒険者達の顔が一気に血が上り顔が赤くなっていた。

「もう謝つたつて許さねえからな、クソガキイ!! テメエは変態の玩具として売りつけてやる!!」

「やってみろ」

我の言葉を皮切りに冒険者達が襲いかかってくるが、数の多さでは勝つてはいたが蛇ダラ・アマデユラ王龍の力を受け継いでいる我の相手にはならず全員地面を舐めることになった。

その後の事は「ガネーシャ・ファミリア」の引き取つて貰い「ソーマ・ファミリア」から賠償金を支払わせる事で決着とした。

その日の夜、ヘスティアに今日のことを話すと憤慨していた。

「全く、ソーマの奴は子供の躰をちゃんとしているのか!!」

「ああ、そうだな」

そう言いながらヘスティアがじゃが丸君にかぶりつき、我はそれに相槌を打つ。

「まあ、向こうにはきつちり賠償金を支払わせたから今回は見逃してやろう」

「ベル君がそう言うならボクも構わないけどさあ・・・」

不貞腐れた様子でそう言ってくるヘスティアに我はこう言った。

「恐らくだが【ソーマ・ファミリア】の内側が問題なのだろう。それも酒関連でだ」

「ベル君、どういう事だい?」

俺の言葉に食いついたヘスティアが問いかけてくる。

「我の専属アドバイザーから聞いた話だがギルドでも換金のことでは揉めているそうだが、それも日常茶飯事と言った具合にな」

「それがソーマのお酒と何の関係があるんだい」

「答えは簡単だ、大金を納めた者だけが神酒の本物を飲むことが出来

るからだ」

「一度でも神酒を口にすれば虜となりもう一度口にしたくばそれに見合うだけの金を持ってこいといった具合にな」

「ソーマの奴、子供達を使ってそんなことを・・・」

怒りを滲ませる声でそう言いながら顔を顰めるヘステイアに訂正を入れる。

「だが、其処の仕組みを考えたのは神ソーマじゃない」

「じゃあ、誰がそんなことをしているんだい」

「派閥内で主神を除いて最も力を持つとしたら？」

「【ソーマ・ファミリア】の団長か!!」

俺が問題風に問いかけるとヘステイアはハツとして答えを導き出す。

「そうだ、しかもその団長様はヤバイ奴等とも連んでいるらしいな」

「そうなのか・・・所でベル君? どうして君は其処までのことを知っているんだい?」

「知っているからだ」

「嘘は付いてないな・・・、じゃあ質問を変えるよ。君はどこまで先が見えているんだい?」

「教えない」

ヘステイアの質問に我自身の言葉でハッキリと拒否の意思を見せる。

「.....」

我の対応に訝しんだ顔をするヘステイア、だがこうするしかない。

「すまないが、これら全てに関しては話すことはない」

「そうか、君が其処までするのには理由があるんだろう。ならボクはもう何も聞かないよ」

「済まない」

「いいよ、別に謝らなくたって。君は君の決めた道を歩いて行けば良いんだから」

「ああ」

こうして、夜も更けてきたこともあって我達は眠りにつくのだった

た。

ここは【ロキ・ファミリア】本拠^{ホーム}である黄昏の館にある会議室。

ここでは【ロキ・ファミリア】の主神と首脳陣と幹部そしてラージャンとの戦闘を経験したレフイーヤが揃っていた。

「皆、集まったね」

最初に口を開いたのは団長であるフィンが早速本題に入る。

「今回集まって貰ったのは五十階層で遭遇したラージャンという生物についてだ」

ラージャン、その名前を聞いた主神を除く全員は顔を顰める。

そこへ【ロキ・ファミリア】主神のロキが全員に問いかける。

「なあ、うちはそのラージャンてのを見てへんから分かれへんのやけどそんなにヤバい奴なんか？つーか、フィンらが苦戦するくらいやつたら更に深層から来たんとちゃうんかいな」

「いや、それはない」

主神の言葉にフィンがそれを否定する。

「フィン、何でそんなこと断言出来るんや？」

「僕もだけど、ラージャンがモンスターでないことはここに居る全員が聞いている」

「誰からや」

「【ヘステイア・ファミリア】のベル・クラネルからだよ」

「って、誰やねん!!つか、ドチビの所の眷族^{ことども}かいな!？」

「神ヘステイアを知っているのか、ロキ？」

フィンから情報提供者の名前を聞きツツコミを入れるが、その主神の名前に反応したことをリヴェリアに指摘される。

「ああ、うちとドチビ・・・ヘステイアは犬猿の仲でな。ドチビの癖に実らせよってからに・・・」

主神の説明から仲が悪いと言うことしか解らなかったが、まあロキの嫉妬から来るものだとも。

「まあ、それは置いといてやそのベル・クラネルっちゅー眷族ことのおか
げっちゅー事やな」

「そうだね」

ロキの言葉にフィンが同意する。

「それにしてもそんな生物がおるとはなあ……」

しかし、そんなら何でダンジョンに居ったんや?」

「それについてはベル・クラネルも疑問に思っていたよ。ラージヤン
は「超攻撃的生物」らしいからね」

「……まあ、皆が生きとるから良しとしようか」

そうして、ロキのその一言で会議は終わりを迎えるのだった。

「……もっと強くなりたい」

自室に戻ったアイズは一人そう呟くのだった。

我が目を覚ますと蛇ダラ・アマデユラ王龍の素材が転がっていた。
これに関しては驚くことはない、【蛇マテリアル・ダラ・アマデユラ王龍の素材】の効果だからだ。

蛇王龍の扇刃×2、蛇王龍の剣鱗×4、古龍の血×6
それが今回スキルで出現した素材だ。

「これなら大剣が・・・無理だな。獄炎石がねえ」
素材を見て思いついた考えを言おうとしたが素地が一つ足りないことに気付いた。

獄炎石、それは蛇ダラ・アマデユラ王龍の大剣を作成するためには必要な素材だがこの世界に存在していないことは明白。

それをどう補えばいいのか思考を巡らせてみると、あることを思いだした。

それは火炎石の事だ、闇イザイルス派閥の自爆装置の要となっている火炎石ならば代わりなるのでは？

その考えに至った我は早速火炎石を求めてダンジョンの深層・四十階層に向かうのだった。

場所は移動し、四十四階層。

ここはまるで火山の腹の中に入り込んだと錯覚させるほどの熱量を発する階層で冒険者の思考と体力を奪っていく。

「最初の探索ではさっさと通過していったからあまり覚えていないんだよな」

そう言いながら歩いていると、左右の炭色の壁面と地面に亀裂が走る。

そこから現れるのは岩石のモンスターであるフレイムロックの大量群。

「怪物の宴か・・・今の我にとつては有り難い!!」

火炎石を求めている我からすれば幸運でしかなく猛然と襲いかか

る。

「うらあつ!!」

最初のフレイムロックの顔面を粉砕したことを皮切りにそのままの勢いで粉砕していく。

大群を全滅させると魔石と火炎石ドロップアイテムを回収しているとあるものを見する。

「これは・・・炎龍の粉塵か?しかし何で四十四階層にあるんだ?」

見つけたのは炎王龍テオ・テスカトルの素材だが・・・、我が炎王龍発見したのは『竜の坩堝』である五十八階層だった。だが、ここに素材があるということはここにいたという事になる確固たる証拠だ。

つまり、炎王龍は最初から五十八階層にいたのではなくこの四十四階層にいて五十八階層まで降りていたと言っていることになる。

「これはあのクソ転生神の仕業なのか?いや、ここまで過剰に手を加えていると言うことはあまりにも行動が派手過ぎる」

転生神の仕業と勘繰ってはみるも動きが活発すぎる。

それだけ派手に動いていれば他の神も気付きそうなものなのだが・・・。

「まあ、今はそんなことを考えていても仕方がないか」

そう言いながら我は再び魔石と火炎石ドロップアイテム回収を始めると衝撃が走った。

それは火炎石に混じって獄炎石があったからだ。

「本当に驚いた、獄炎石がダンジョンにあるなんて・・・まさか!」

俺は獄炎石に驚きながらある可能性が頭を過った。

それは・・・ダンジョンの改変。

我をこの世界に転生させた転生神が介入しダンジョンそのものを改変した可能性、これが頭の中から抜け落ちていたことに気付いた。「いやいや、幾ら神とは言えそんな介入が許される訳がない。明らかに逸脱しすぎている。しかし、本来ありもしない生物や鉱物が出てきているとなると否定も出来ないか」

頭の中で色々な可能性を巡らせるが、確信に至るものは無い。

「これはまだ可能性の話で済めば良いんだがなあ・・・」

そう愚痴を溢しながら我は魔石と火炎石ドロップアイテムと獄炎石を回収し地上にも戻るのだった。

ダンジョン探索二日目にして獄炎石ありえないものの登場にダンジョンの改変が行われているかも知れないという疑問を抱きながら我オレは地上に戻つてくると魔石と獄炎石を除く怪物素材ドロップアイテムを換金し、足早に本拠ホームへと帰還する。

「今、戻ったぞ」

「お帰りベル君、たくさん稼げたかい？まあ、君の【ステイタス】だとダンジョンのある程度深くまで進めるだろうからね」

「まあ、そうなんだがダンジョンで不味いことが起こっているかも知れない」

「どういうことだい？」

我の言葉にヘスティアは顔を顰め、真面目な声音でそう聞いてくる。

「実は私の元いた世界にしかなかった獄炎石ドロップアイテムがモンスターから怪物素材として発掘された。モンスターといい、獄炎石といいこうまで私の元いた世界と関連している

ものが出てくるというのも何者かの作為を感じている」

「つまり、その君の言っている何者かの作為って言うのは……」

「ダンジョンの根本的な改変」

我とヘスティアの絞り出した言葉が完全に一致する。

「まさかそんな……あり得ない。いや、神々なら……いやそれでも……」

あまりの衝撃の強さにヘスティアは自問自答を始めてしまう。

我も事の大きさに戦慄しながら考えを巡らせてはみるものの妙案は浮かばなかった。

「ヘスティア、今現状把握が一番の手でしかないようだ」

「うん、ボクも考えてはみたけどダンジョンのことはベル君に任せっきりになってしまうね」

こうして、俺達は話し合いを終えて眠りにつくのだった。

話し合った日の翌日、眠りから覚めると寝ぼけた状態で蛇王龍オスレの素材を片付けた後へスティアを起こしたが起きず朝食を食べ今日の目的を実行するために荷物を持って本拠ホームを出るのだった。

ちなみにへスティアは今も眠りこけている。※あと一時間後でバイトの時間

まあ、困るのはへスティアなので反省という意味でも学んで貰おう。

そうして我は目的の場所に辿り着く。

その場所というのが原作での仲間の一人であるヴェルフ・クロツゾの鍛冶工房、今日の目的は蛇王龍の素材を使ってヴェルフに武器を打って貰うことだ。

「誰だ、お前」

工房の扉の向こうから声を掛けようとしたとき、後ろから声が掛けられる。

「ここに何の用だ？」

「実は・・・」

「魔剣なら打たねえぞ」

警戒心でそう言ってくるのは原作での仲間鍛冶師のヴェルフ・クロツゾ。

我が要件を伝えようとした矢先、ヴェルフがそう言ってくる。

「お前の言いたいことは解ってる、他の連中と同じで【クロツゾの魔剣】が欲しいんだろ」

「要らん」

「いいか、武器つてのは使い手の半身だ!!武器つてのは使い手の命を守るもんなんだよ!!」

「いや、話聞けよ」

「それに比べて魔剣は限界が来れば砕けちまう、使い手を見捨てて砕けちまうそんな俺は武器としては認めねえ!!」

「おい」

「俺は魔剣を打たない、解ったら帰れ!!」

「いい加減にしろ」

「ぶべらっ!?!」

我は思わずヴェルフに平手打ちを喰らわせる、こうでもしないと互いに話せないからな。

「てめえ、何しやがる!!」

殴られたヴェルフは私の胸倉を掴んでくる。

「お前は人の話を聞け、魔剣を求める奴等ばかり相手にしているからとはいえやたらめったらに魔剣目的の客と決めつけていると本当に終わるぞ」

「なんだと?」

私の言葉に少し冷静さを取り戻したヴェルフに更に言葉続ける。

「我はお前にこの素材全てを使って大剣を打って欲しい」

そう言っって我は素材の入った袋を目の前に出した。

「なんだこりや、どの素材も見たことがねえ・・・」

ヴェルフは袋に入っている蛇王龍の素材を手に取り戦慄する。

「どうする、ヴェルフ・クロツ鍛冶師」

「上等だ、やってやる!!」

挑発混じりにそう言うのとヴェルフはやる気に満ちた声でそう返してくる。

「じゃあ、頼んだぜ」

「おう、任せろ!!・・・っと、そういえば名前なんて言うんだ?」

「ああ、名乗れてなかったな。我は「ヘスティア・ファミリア」のベル・クラネルだ」

「そうか、ベル俺が最高の大剣に仕上げてやるぜ!!」

「ああ、頼む」

そうして、我はヴェルフに武器制作をした後ダンジョンに向かうのだった。

ヴェルフに仕事の依頼をした後我はダンジョンに来ていた。

「さて、他に影響を受けている場所がないか探すとするか」

俺の前世に存在した獄炎石がこの世界のモンスターから採取された。

それは何者かによるダンジョンの根本的改変、それが起こっている可能性が高い。

「全く、面倒なことをしてくれるな」

その改変を行っている可能性があるとするれば我をこの世界に転生させたあのクソツタレだ。

あの快樂主義者が考えそうなことではあるが……。

「まずは上層からだな」

そうして我の異変調査が始まるのだった。

調査を始めて数時間が経過したがこれといって決定的なものは無かった。

「ふむ、これだけ探してもそれらしいものが一切見つからなかったと言うことは我の思い過ぎしな訳がないか……、実際に見つかっていないのだから何らかの変化は起こっているはずだ」

そうして、今日の調査もといダンジョン探索を終了した。

本拠ホームに帰ると夕食を済ませると今日の調査報告をヘスティアにする。

「上層にはこれといって変化は見受けられなかった」

「そっか、それならひとまずは安心かな」

我の報告を受けヘスティアはそう判断した。

「しかし、油断は出来ん。改変が何処で成されているのか解っていない現状ではどれほどの被害を生むのかも計り知れん」

「そうだね、これからも警戒を頼むよ」

「ああ」

そうやって話し合った後、我達は眠りについたのだった。

翌日、目を覚ますと蛇王龍の素材があった。

蛇王龍の剣鱗×6、蛇王龍の胸殻×2、蛇王龍の鋼皮×4、渦巻骨×8、古龍の血×2

これが昨日今日の獲得した素材の合計だ。

「これなら太刀が鍛造れるがまた今度にしよう」

そう言いながら我はダンジョンに向かうべく準備を整えるのだつた。

ヘスティアの朝食を用意した後、自分の朝食と準備を終えた我はすぐにダンジョンに向かった。

その途中、奇妙な視線を感じ取るとその方向へ身体を向けるとその先には摩天楼施設があった。

「なるほど、今のは神フレイヤか・・・」

原作同様にベル・クラネルは目を付けられたと言うことだ。

「ダンジョンの事といい、面倒だ」

そう言いながら我はダンジョンに向かうのだった。

その頃、ダンジョン二十四階層の西に位置する通路に一体の竜モンスターが出現する。

その竜はくすんだ桃色の鱗に背中から尻尾にかけて黒い体毛が生えている。

すると、竜が突然背中から翼を展開し、鼻先からも何やら骨らしきものを展開し周囲の匂いを探っている様子を見せる。

そして、竜は何かを嗅ぎつけそれに目掛けて走り出す。

その方向に居たのは負傷し血を流す冒険者数名。

「ブラッドサウルス!？」

「違う、別の奴だ!!」

「くそつ、こんな時に!!」

「たすけ・・・」

冒険者達が悲痛な声を上げるも竜は構うこと無く巨大な顎を開け冒険者に食らい付く。

「「ぎゃああああああああああああつ!!!」」

冒険者達はその竜に為す術もなく食い殺されてしまった。
冒険者を襲った竜の正体・・・それは
・・・。

【蛮顎竜】 アンジヤナフ

「グウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!!」
二十四階層にアンジヤナフの咆哮が響き渡った。

ダンジョンに入った我は上層を駆け下り中層に到達すると早速モンスター共が襲ってくる。

「邪魔だ」

火を吐こうとするヘルハウンドを蹴り飛ばし、アルミラージを踏み潰し、バットバットはアルミラージの石斧で打ち落とし、ハード・アーマードは拳を叩き込んでいく。

そうしてモンスター共を片付けていき、我は十八階層にやって来るとならず者の街が騒がしいことに気付く。

その事が気になり立ち寄ってみると、其処には一人の血塗れの冒険者とそれを取り囲むリヴィラの住人。

「おい、これは一体何があったんだ？」

俺が一人の住人に話しかけると、驚きの内容を聞かされる。

「ああ、なんでも二十四階層でブラッドサウルスらしきモンスターに襲われて逃げてきたらしいんだがそいつに仲間を喰われちゃったらしい」

「そうか」

冒険者という危険なものに身を置いていればやって来る出来事、最初はそう思っていた。

次の言葉を聞くまでは……。

「しかも気でも可笑しくなったのかそのブラッドサウルスはくすんだ桃色の鱗に黒い体毛と翼に鼻が隆起したって言い出す始末だからな」

「!!」

俺の反応に気付かずその住人は話を続ける。

「しかも、それだけでもあり得ねえのに跳躍したり炎まで吐きやがると言いやがるんだから相当狂っちゃってんな」

「そうか、だが命あつての物種だからな」

「全くだ」

そうして、我はリヴィラを出るとそのまま二十四階層に向かうのだった。

十九階層を踏破した我は二十階層に入ると其処にはアイズとレ
ファイヤーがいた。

「劍姫に千の妖精か」
サウザンド

「貴方は」

「ベル……」

「!？」

アイズが我の事を名前で呼んだことに対してよほど衝撃的だった
のかレファイヤーが驚き顔をしながら固まっている。

「何かあったの？」

「ああ、まあな」

それを無視して我達は話を進める。

「ラージャンと同じように我の（前世の世界）で生息していたモン
スターが冒険者を襲ったらしい」

「!？」

我の言葉にアイズとレファイヤーはその話を聞いて驚愕し目を見開
く。

「そのモンスターってどんなの？ラージャンみたいに強いのか？」

そう言ってくるアイズの問い。

「名前は【壘顎竜】アンジヤナフ、強さ的にはラージャンと比べれば下
だが油断すればLv. 3ですら死ぬ可能性は高い」

「!!」

我の言葉にレファイヤーが顔を青ざめている。

まあ、無理もないか。

死ぬと言われて動揺するのは正常な判断な方だからな。

「そのモンスターの居場所は解ってるの？」

「さつきアンジヤナフに襲われたという冒険者が十八階層のリヴィラ
で治療を受けていてな、二十四階層で遭遇したと言っていたが当てに
は出来ん」

「何故ですか、モンスターなら階層に留まっているものですよし」

そう言ってくるレファイヤーに対して我はこう返す。

「それはダンジョン産まれのモンスターの話だ、アンジヤナフは歴史した生物だから階層に留まることは考えにくい上に奴の習性からも留まっている可能性は低い」

「習性？」

「ああ、アンジヤナフは一度獲物と定めた物に執着する。恐らくだがリヴィラに逃げ込んだ冒険者のことを追いかけてくるかも知れないと言うことだ」

「だったら、戻ってその冒険者を守らないと!!」

レフィーヤがその話を聞き、声を荒げる。

「千の妖精、我が可笑しいと思つた所はそこだ」

「え？」

我の言葉にレフィーヤは疑問符を浮かべる。

「アンジヤナフが重傷の冒険者にまんまと逃げられていることがだ」

「他のモンスターに邪魔されているからでは？」

「それなら……って、剣姫はどこだ？」

「アイズさんならさつきまでそこに……」

「グウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!」

レフィーヤと話し込んでいる内にアイズが居なくなり、西の方角からアンジヤナフの咆哮と思わしきものが響いてくる。

「まさか……」

「そのまさかだろ」

レフィーヤの言葉に同意しながら我達は走り出す。

「はあ……はあ……はあ……はあ……はあ……はあ……はあ……」

しかし、蛇王龍ダラ・アマテユラの規格外性能スベックを持つ我に着いていけずレフィーヤは息絶え絶えになっている。

「千の妖精、今は事態が事態だから許せ」

「はあはあ……っ、えっ!?!」

我はレフィーヤを抱え全力でアンジヤナフの居る方角へと駆け出した。

「きゃあああああああああああああつ!?!」

駆け出した瞬間、地面は抉れ踏み割れる。

そして、あまりの敏捷はやさに絶叫するレフィーヤだが早く目的地に辿り着かなくてはいけないため我慢して貰うしかない。

そうして、目的の場所に着くと其処には切り刻まれ息絶えたアンジヤナフとその上に佇むアイズがいた。

「全く・・・、流石と言うべきかなんというか・・・」

その光景を見ながら言葉が漏らすとアイズが此方に気付く。

「あつ、ベルにレフィーヤ、遅かったね・・・」

この発言に対して我はちよつとイラツとしたので反省させると言う意味でこう言った。

「今の事は九魔姫ナイン・ヘルに伝えるからな」

「!?」

母親リヴェリアに伝える、それは少女アイズにとつては一番効く説教くすりだ。

リヴェリアの名を出されて動揺しあたふたするアイズを尻目に我はアンジヤナフに近付く。

すると、鋭い剣での傷の他に爪で引き裂いた様な傷もあった。

「おい劍姫、この爪痕のようなものはなんだ？」

「！ 解らない、その爪痕は私が戦う前からあった。それに動きがおかしかったよ」

この爪の攻撃だけじゃないな、恐らく・・・。

「毒か」

「それならダーク・フィンガスの毒を受けていたと言うことでしょうか？」

「ううん、それなら爪痕以外の場所にも毒の粉が付いてるはず」

毒についてのレフィーヤの指摘にアイズがすかさず否定する。

「爪に毒・・・」

それなら思い当たるモンスターがいるんだが・・・。

今は考えても仕方がないか、とりあえず剥ぎ取りを済ませるか。

「何をしていますか？」

我の行動を疑問に思ったレフィーヤが問いかけてくる。

「素材を剥ぎ取っているんだ、こいつらの素材は武器や防具になるからな」

「へえ、そうなんですか・・・って本当ですか!？」

私の説明を聞きレフィーヤがそう答える。

「ああ」

蛮顎竜の鱗×2 蛮顎竜の牙×1

「ほら」

「？」

我がアンジヤナフの素材をアイズの前に出すと首を傾げる。

「お前が狩ったのだからこの素材はお前のモノだ、劍姫」

「解った」

私の行動の意味を理解し、アンジヤナフの素材を受け取るアイズ。

「それでは、我はここまでにするがお前達は如何する？」

「私達も帰ろつか」

「はい、アイズさん」

そうして、アンジヤナフによる冒険者襲撃事件は幕を閉じた。

しかし、問題はアンジヤナフに毒を喰らわた正体は未解決のままである。

アンジヤナフ討伐の翌日、我はヴェルフの工房に来ている。ヴェルフから注文していた大剣が出来上がったという連絡があったからだ。

「ヴェルフ、完成したんだってな」

「おうよーベル、これがお前の大剣だ!!」

そう言つて目の前に出されたのは正しく我の望む大剣。

一見、戦斧と見紛うてしまう程巨大な刃を持つ大剣。

その一振りは幾万のモンスター^{いのち}の生命断ち切るだろう。

「ヴェルフ、良い出来だな」

「そうか？ 気に入って貰えたんなら俺も満足だ」

こうして、俺は「大振りな剣鱗の欠片」を手にした。

「ベル、頼みがあるんだ」

「なんだ？」

「俺をお前の部隊^{パーティ}に加えて欲しいんだ」

「別に構わない」

「本当か、助かる!!」

こうして、我はヴェルフと部隊^{チーム}を組むことになった。

その後我とヘスティアは「ロキ・ファミリア」の本拠^{ホーム}である黄昏の館に訪問している。

何故、そんなことになっているのかというと昨日アイズがやらかしたことをただ事実だけを書き記した手紙をエイナ経由で渡して貰った。

アイズの方は完全に油断していたようでもさか手紙で伝えてくるとは露にも思っておらず母親^{リヴェリア}と团长^{フィン}にこっそり絞られたらしい。

そうして、通された応接室で待っているとフィンとリヴェリア、ガ

レス、ベート、ティオネ、ティオナ、ラウル、アナキティと疲弊しているアイズとレフィーヤ、何故かボロボロの神ロキがやってきた。

「すまない、待たせてしまったね」

「構わない、そっちにはそっちの事情があるからな」

フィンの言葉にそう返して対談が始まる。

「始めに自己紹介をしておこうか。ロキとは初対面だろうしね」

「せやな、初めましてやな。ウチが「ロキ・ファミリア」の主神ロキや」

「初めまして、神ロキ。我はベル・クラネル「ヘスティア・ファミリア」の団員です。それでこつちが……」

「ああ、ドチビやろ」

「ちよつと待て、ロキ!!ボクの自己紹介の邪魔をするんじゃない!!」

「ハン!!ドチビの自己紹介なんぞ……ブゲラツ!!」

「ロキ、彼は我々の恩人だ。仲の悪い神の眷族だからと言って喧嘩腰は止めろ」

「済まないねベル・クラネル、神ヘスティア」

リヴェリアがロキを窘め、フィンが謝罪してくる。

「それは構わないんだが……、部屋に入ってきた時から気にはなっていたんだが神ロキは何故ボロボロなんだ?」

「なに、いつものことだから気にしないでくれ」

「解った」

「いや、ベル君それで納得するのはおかしいと思うよ!」

我の切り替えの早さにツツコミを入れてくるヘスティアだが無視^{スル}する。

「昨日の一件は全てアイズとレフィーヤから聞かせて貰った。また君の住んでいた場所からモンスターがダンジョンに現れた様だね」

「ああ、前回のラージャンに引き続いてダンジョンの外にいるモンスターがダンジョン内にいたと言うことになる」

「なあ、そのラージャンって言うモンスターのこともうちよい詳しく聞いてもええか?」

「構わない」

さつきまで痛みを悶えていたロキが復活しそう言ってくる。

「フィン等の遭遇したラージャンつちゆうモンスターは瀕死に近い状態やったんやろ、それでも第一級冒険者が苦戦するようなそないな化け物をそこまで追い込めるんや?」

「簡単に言えば純粋な強さだが、後は数だな」

「つまり、今のダンジョンにはそのラージャンを追い詰めたそのモンスターがまだ居るつちゆう訳やな」

「いや、それは我が狩っておいた」

『は?』

ロキの言葉を否定するように我がそう言うのと全員が素っ頓狂な顔をする。

「竜の坩堝に降りたときにな。そこには古龍がいた」

「古龍?」

「簡単に言えばあらゆる生態系を逸脱した生物だ」

「つまり、どういうこと?」

「化け物」

我の言葉に全員が口を閉じる。

すると、ラウルが話しかけてくる。

「あの、純粋にその古龍について知りたいッス」

「ラージャンを追い詰めた古龍の事か?」

「はいっす」

「解った。ラージャンを追い詰めた古龍の名は【炎王龍】テオ・テスカトル、炎と爆発を操る古龍だ」

「炎と爆発・・・」

「後方に伸びる長い角、口外に露出した鋭い牙、そして赤い鬣と、獅子にも見える頭部が特徴の古龍で王を思わせる堂々たる気風、古龍種の中でも特に凶暴と云われる荒々しい気性を兼ね備えている古龍だ。

業火の王、煉獄の主、陽炎龍、炎帝などと呼び名も多様だ」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

我の説明を聞いてロキ・ファミリアは黙り込む。

すると、アイズがこう言ってくる。

「他の古龍についても教えて欲しい」

「それは挑むために対処法として聞くという意味なら我は教えるつもりはない」

「どうして?」

「その答えは己自身がよくわかっているんじゃないのか」
「!!」

我の言葉にアイズは目を見開く。

「じゃあさ、昨日アイズが倒したっていうアンジヤナフってどういうモンスターなの?」

「アンジヤナフは古龍でも古龍級生物でもない普通のモンスターだ。獣竜種に位置づけられている」

空気を交えるように質問をしてくるティオナに答える。

「それって強いのか?弱いのか?」

「それは個体によるから見た目による判別は難しいな」

「そっか」

ティオナは我の言葉にそう返すのだった。

そうやって話していると、フィンがこう言ってくる。

「もし、そのモンスター達がダンジョンの中ではなく外から来たらどうなる?」

「ヤバイ」

「いや、急に説明が雑やんけ」

「そう答えるしかないからだよ、神ロキ」

フィンの質問に答える我にツツコミを入れてくるロキにそう返すのだった。

カンカンカンカンッ!!

「きゃああああああああああああああああああっ!!」

「ゴオアアアアアアアアアッ!!」

すると、外から悲鳴とともにモンスターの鳴き声が聴こえてくる。
「何だ何だ!!」

突然の事態にヘスティアが慌てる。

「待て、アイズ!!」

リヴェリアが静止するも聞かずに飛び出していく。

「フィン、あたしも行くね!!」

「待ちなさい、馬鹿テイオナ!!」

「待ちやがれ、バカゾネス!!」

「ま、待って下さい皆さん!!」

アイズに続いてテイオナ、テイオネ、ベート、レフイーヤが部屋を飛び出す。

「すまない、ベル・クラネル。もし・・・」

「ああ、我の所に居たモンスターなら対処しなくてはな。だが、まずは本拠ホームに武器を取りに戻らないといけないがな・・・」

フィンという言葉を皆まで聞かずとも解ったため、俺はヘスティアにこう言った。

「ヘスティア、神ロキも連れて俺達の本拠ホームに避難しろ」

「えっ、どういう事だい!?!」

我の言葉に動揺するヘスティアに説明する。

「もし、ここまで被害が及ぼすモンスターなら主神であるヘスティアと神ロキを守る事も重要になってくる」

「確かに・・・、ラウルにアキは先行してアイズ達を援護しろ。それからクルス達にロキと神ヘスティアの護衛をするように伝えろ」

「了解(っす)!!」

フィンプレイヤーの命令に二人は即行動し事態が動いていく。

「勇者感謝する。行きはさつきも言ったが武器を取りに行く為同行する」

「解った、出来る限り早く頼むよ」

「ああ」

こうして、各々が行動を開始する。

オラリオの都市門上で警備をしている「ガネーシャ・ファミリア」の第二級冒険者二名はあるものを視認する。

「おい、あれはなんだ？」

「どれだ」

最初に一人が気づきもう一人に声を掛ける。

「ほら、あれ」

そう言いながら街道に向かって指を指す、その先には黒い影が土煙を上げて迫ってくる。

「モンスター!!」

もう一人が猛進してくる影の正体に気づき街の警鐘を鳴らす。

「モンスター襲来!!モンスター襲来!!」

その警鐘によってその場が大混乱パニックに陥る。

すぐさま「ガネーシャ・ファミリア」の憲兵達がモンスター襲来に対処するために集結する。

指揮を撮るのは「ガネーシャ・ファミリア」団長のシャクティ・ヴァルマ。

「総員戦闘準備、目標は獣型モンスター!!」

「おおう!!」

そして、ついにモンスターが都市門にやってくるも激突し門を破壊する。

その正体は鮮やかな桃色の毛に長く鋭い爪を持ち大きく膨れ上がった腹に黄色トサカを持つ牙獣種モンスター《桃毛獣ババコンガ》

「ゴオアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!」

「かかれえ!!」「おおおおおおおおおおおおおお!!」

その咆哮に冒険者達は雄叫びと共に攻勢を仕掛ける。

「風よ!!」

その時、一人本拠ホームを飛び出してきたアイズも現場に到着する。

「竜じゃないけどベルの所に居たモンスターなのかも?でも、考えている暇はない!!」

自己完結させアイズはババコンガに斬りかかる。

【ガネーシャ・ファミリア】の冒険者が攻撃しようとした瞬間、ババコンガは軽快な身のこなしで躲し爪の一撃を見舞う。

「ぐああああああっ!?!」

その一撃を受けた冒険者は傷を負ってしまう。

「!?!」

見た目とは裏腹に軽快な身のこなしを見せるババコンガにアイズは最初に出くわしたラージャンを思い出す。

「ラージャンもあの巨体で速かった、同系統のモンスターのかな」

アイズはそう考えながらもまずは動きを止めるために四肢を狙う。

しかし、鋭い剣の一撃もババコンガの身のこなしで躲されてしまい、更に爪による一撃が迫ってくる。

「させるかー!?!」

その声と共にババコンガの翼を弾いたのは遅れながらも到着したテイオナである。

「テイオナー!」

仲間の到着に声を出すアイズ。

「一人で突っ込んで行き過ぎよ」

「あれが門をぶち抜いて入ってきたモンスターか」

「はああ、お待たせしましたアイズさん」

「一応効くか判んないツスけど魔剣も持ってきたツス」

「慎重に行くわよ」

その後からもテイオネ・ベート・レフィーヤ・ラウル・アナキティが到着する。

しかし、アイズ達【ロキ・ファミリア】は知らない。

ババコンガのある習性を……。

「場所は変わって【ヘステイア・ファミリア】^{ホーム}本拠地教会。
「それじゃあ行ってくる」

「気をつけてねベル君」

「ああ」

我はヘスティアとロキを連れて本拠ホームに戻って武器を持ってモンスターの出現した都市門に向かう。

護衛は「ロキ・ファミリア」の冒険者だから問題はない。

だが、今回オラリオに現れたモンスターのすることについて考えていると逃げてきた住民達がモンスターのすることについて話しているのが聴こえた。

「都市門ぶつ壊したモンスターってのはどんなだった？」

「黄色いトサカを持った桃色の毛のモンスターだった!!」

それを聞いた我は何ふり構わずに走った、全力で。

「ウラアツ!!」

「フゴツ!!」

ベートの強烈な蹴りが直撃し都市門近くまで押し込んだ。

しかし、ババコンガはケロツとした様子で起き上がり突然後ろを向く。

「逃さないツスよ!!」

逃走とみたラウルが逃さないように一撃を入れようとした瞬間、それは放たれた。

「ぶううううううっ!!」

「臭くくくくくくっ!!」

強烈な異臭を放つ放屁、近付いていたラウルは直撃しアイズ達にも向かっていったがアイズの風魔法で其れは免れた。

「ガアくくくくくくくくくくくくっ!!!」

「イヤアアアアアアアアアアツ!!!」

「気持ち悪い・・・」

「おえええええええええええええええええ!!」

「あの糞猿絶対殺す!!」

正に阿鼻叫喚の地獄が誕生した。

獣人である第一級冒険者ベクトと第二級冒険者アナキの鼻は死んだ。

獣人達ほどではないが他の冒険者達もその強烈な異臭に吐き気を催す。

そこに我とフィンとリヴェリア、ガレスが到着した。

「なんだこの異臭は!」「これは酷いな・・・」「気持ち悪くなってきた」

「済まない、我は優先順位を間違えていた。最初に確認に行くべきだった」

「どういうことだい?」

三者三様の叫びに我が謝罪するとフィンが問いかけてくる。

「今回オラリオに現れたモンスターは桃毛獣ババコング、こいつは別名が密林の無法者と呼ばれていて我の場所でも嫌われ者のモンスターだ」

「その理由は?」

「威嚇の放屁にゲップしまいには糞を投げつけてきやがる糞モンスターだ」

「文字通りという理由じゃな」

その問いに答えるとガレスが納得の言葉を返してくる。

が、ここで終わらないのがババコング。

「だが、ババコングの恐ろしい所はそこじゃない」

「未だあるのか!?!」

先程の説明が続いていることに驚くりヴェリア。

「しかもこの異臭は一度染み付くと洗っても中々落ちない上に酷い時には買い替えも余儀なくされる」

「それは色々と拙いね・・・」

「ああ、拙い」

そんな事を言っているとアイズ達がやってくる。

「フィン!リヴェリア!ガレス!ベル!」

「やっと来てくれた~~~~~~~~っ!!」

「さっさと片付けるわよ!!」

「おせえんだよ・・・兔野郎・・・」

「団長・・・」

「リヴェリア様・・・」

ベートとアナキティの消耗が激しい、異臭にやられたことが如実に判る。

五人が無事に姿を見せるとフィンが問いかける。

「アキ、ラウルはどうした？」

「ラウルは・・・あのモンスターの・・・直撃して・・・」

「あ、うん解ったもう良い」

アナキティの反応を見て放屁にやられた事を察せられた。

「しかし、参ったな。この臭いは厄介だぞ、ベル・クラネル何か対処法はないかい？」

フィンの問いに我は答える。

「あるにはあるが・・・今それを用意している暇はない」

「なるほど、早急にあのババコンガというモンスターを討伐する必要があるということか・・・」

「その通り」

我の返答に槍・斧・杖を構えるフィン・ガレス・リヴェリア。

「とりあえずババコンガをオラリオから遠ざける」

「そうだね、これ以上撒き散らせるわけには行かない」

「私も同行させてくれ」

その声の方を見るとそこには「ガネーシャ・ファミリア」団長
【象神の杖】アンクレーシャ シャクティ・ヴァルマがいた。

「ガネー^ッシャ・ファミ^チリアからもその・・・被害者が出たのでなケジメを取らせてくれ」

「構わない」

「ありがとう」

そうして俺達はババコンガ討伐に打って出る。

「ゴアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!」

咆哮を上げババコンガが突っ込んでくる。

「とりあえずお前は飛んでけえ!!」

ドゴンツ!!

そう言いながら我は大剣を振るいババコンガを都市の外にぶっ飛

飛ばした。

「なんだ、その規格外の力は・・・!?」

「そんな事どうでもいいだろ、とにかく今はババコンガを討伐するのが先だ」

シヤクテイの反応に我はそう言っただけで俺達はババコンガを追って都市の外に出る。

「あの桃毛野郎、ふざけた真似しやがって・・・!!」

異臭の衝撃から回復したベートがババコンガへの怒りを吐露する。

「これに関しては済まない、先に確認しに行くべきだった」

「いや、君の主神を気遣う想いに間違いはないさ」

我の謝罪にフィンが優しく援護してくれた。

「つていうか、あのモンスターどこまで飛ばしちやったのさー!!」

「済まない、なるべく遠くと思っただけで飛ばしすぎたな」

「どんだけの馬鹿力なのよ・・・」

テイオナの言葉に我が謝罪するとテイオナは呆れ返っていた。

「それであるモンスターは一体何なんだ？」

「あのモンスターは桃毛獣ババコンガ、(前世の)我が住んでいた土地にいた純粋な生物だ」

「なんだと!?!」

シヤクテイの問いに答えると驚愕する。

「驚くのは無理ないがこれは事実だ」

「あれがダンジョンのモンスターでなく生物・・・」

あまりの事実にシヤクテイは頭を抱える。

「まあ、今はそんなことはどうでもいい。今はババコンガを仕留めるのが先だ」

そうして、俺達はババコンガを追うためにオラリオを飛び出した。

しかし、我達は知らなかった。

ババコンガを飛ばした方向に《龍》がいることを・・・。